

の伐採作業は前冬の仕事より以上につらいものであった。今振り返ってよく生きて帰れたものだとつくづく思う。

抑留体験記

福島県 有賀 貞

全抑協中央連合会の方からの要請でシベリア抑留体験記を執筆するように指名された、しかし今から四十数年前のことであり、最近記憶も薄らぐようになり、元軍人にして戦争に負けた者は戦陣訓の救いに

海ゆかばみづく屍山ゆかば草むす屍

大君の辺にこそ死なめかいりみはせじ

とあるように、死をもって奉じなければならぬのに生きてまざまざ恥をかきたくないのです書き残すことはためらったが、子々孫々に敗戦の経験を踏ませたくないし、シベリア抑留などみじめなことを将来においてさせたくないのです、今から記憶のあるところを記述してみま

す。

終戦になるまで

みんなも知るとおり昭和二十年八月広島、長崎に原爆が投下され、ポツダム宣言により終戦のさざしがあつたのに、ソ連は八月九日満州国に進駐して来た。

吉林省吉林市機動・団司令部及び第五〇二部隊七三五部隊出動の命により吉林省敦化の西北方、東京城付近の広野に布陣すべく部隊長以下二千人以上の貨車により出発し八月十一日朝、ソ連BT十七トン戦車に肉弾攻撃をした。しかし、四キロ爆弾をキャタピラにさし込んだが、一、二回で突破され、戦いはどうにもならなかった。とにかく一列縦隊で十五車両くらいの戦車が時速二十キロくらいの速さで進んで来るので応戦したものの、我が部隊は速射砲で対戦するでなし、負け戦であり犠牲が出るばかりであった。そして十五日正午の玉音放送により終戦になったそのときの悲しいこと悲しいこと。死んでしまふかなあ、これからどうなるのかと脳裏の中で迷ったが、とにかく死ぬのはいつでも死ぬると思ったので部隊の命令による行動をした。そのころ若年の将校で自決

した人もあった。

吉林の部隊へ帰ってまた敦化の飛行場へ、八月十八日から武装解除の命を受け、兵器弾薬等兵器庫一部の者は広場へ集積してソ連将官以下の来るのを待った。

そのときの気持ちは残念と悲しいのとソ連へ行つて日本へ帰れるのか、これからどうなるのかと思うと死んでしまふか、これ以上苦しみたくないなあと思つた。

八月二十日午後三時ころになってソ連兵の運転するマンドリン銃を持った兵隊十五、六人が乗った自動車三台を先頭に部隊内にはいつてきて自動車が停車し兵隊が下車するや、自動小銃を持って周辺を警戒した。勝者敗者の違いであるが、ソ連兵は独ソ戦で勝ちその勲章を重そうに胸に下げ意気揚々だし、私たちは残念無念これが敗者の心境かなあ、と情け無く泣くにも泣ききれずの思ひであつた。

敦化幕舎生活から入ソまで

八月二十日午後七時ころになって敦化へ出発するとの命により出発することになったが、前回の出勤の際は部隊内まで鉄道線路のあるところまで客車それから貨車が

来て構内から出発したのに、今度は徒歩とは何たることかと思ひしも行動をともした。敦化の飛行場へ到着したのは三日後、それで将校以上は別に、準士官以下兵隊は一緒になつてソ連へと行くことになり別れてしまつた。我々は敦化の飛行場の建物そしてあの広場へ幕舎を建て十人一組となつて生活を始めた。そのころ八三五部隊の曹長川上、高田、松尾、長谷川、私の五人で話し合い、川上曹長が私に今晚逃げるから用意しておるようにと言われたので、私はソ連へ行つて労働をさせられ何年過ぎれば帰れるか、それとも死んでしまふのかと思ふとき、決断して「逃げるから」と言うて暗くなるのを待った。夕食が終わつた七時ごろ幕舎の中で、中山、坂本、鈴木、鯉淵、赤間の五人が私の身边に近寄り、中山が代表で私に対し、有賀曹長さん、我々に戦争をやらせ戦争に負けこれからどうすかと思つておるのに、我々をかまわないで逃げようとするなんてひどいでないか、行かないで一緒に行動してくれと私のこの両腕をつかみ泣かれるので私もみんなと泣き、これらの者を置去りにしておられなかつたので、私はみんながそのようなことを

話すなら、私はみんなと行動をとるから私に「命」をあげろ、と言って逃走するのを断念した。それでソ連へ行くことになった。

川上、高田、松尾、長谷川の四人は夜吉林へ出発したそうだが、松尾曹長が戻って来て、逃走して夜間だけ歩くことにしたのだが、満人たちの警戒が厳しく捕まってしまう、裸にされ何もかも取られてしまい、また帰されてしまったということで、我々の幕舎へ戻されたのであった。

私は部下と約束してから死んでもよいからみんなと行動し、戦争が終わったのだから日本へ帰るまで頑張ろうと思って行動した。

それから寒くなりつつ九月になり、九月十九日午後三時ころ満州最北端満州里の国境を越え入ソしたときは、ああここまで来てしまったと覚悟を新たにした。

それから二段ベット貨物車に乗った千人編成の貨車に乗ること二十一日間、満州里、バイカル、外蒙裏側の方を汽車に乗せられ最終点ロフソフカ、「忘れられないところ」に到着し収容所生活にはいった。

十月八日だったか、収容所へ入ったら満州国綏芬河付近にあったような洞窟兵舎がわりで、二段ベットで一棟二百人くらいのもので五棟あり、着ていった防寒服で寒さをしのぐのだが十一月ころになって寒さを感じる日が多くなって来た。毎回の食事は満州から持って行ったコウリヤン、トウモロコシでつくった飯カーシャ、黒パン百グラムくらい、スープ等で量は飯ごうのふたに半分くらいのおわずかな量で、いつも空腹感であり、仕事は八時間労働で、それにノルマつきでダワイダワイと追い立てられるので、栄養失調の患者が多くなりつつあり、近くに病院があるので患者で満席になった。

栄養失調で毎日七、八人死に全部で四百人くらい死んだ。
十一月末ころから栄養失調の患者日増しに多くなり、近くにある病院へ行く者も多くなり、収容所(ラーゲル)のベットがからになり、二階のベットというように空いてしまい寂しくなりました。十一月になって朝点呼の際に、二階に寝ていた人が起きてこないの起こしに行ったら、何と冷たくなって死んでおるでないか。それ

で四、五人で階下におろし警備の将校に話したところ、その場で裸にしパンツ一枚にして収容所の端にある死屍室にはおり込んだのである。我々は日本国では仏様として遺体を仏式、神式により丁寧に取り扱うのに「なんのことか」と聞くに、ソ連は社会主義社会なのだ、仏式も何もなく「死んだ人は物でその辺の丸太棒と同じ」と言ううて処理したのであった。私たちはいくら何でも思ったが、敗戦国で囚人扱いなのだから仕方なく泣くに泣かれず悲しみ、ああ私もあのようにして死んでいくのかと思うと、やはり早いとこ冥土に行った方がよかったかなあと思った。

そのころは寒さも一層厳しくなりラポータも休む日もあったので、近くの病院へ第八三五隊から一緒に来た仙台出身の鯉淵のところへ行ったら、栄養失調で顔をぶくぶくにして私が行ったことを喜び、「有賀さん近くダモイだってね」と言うので、私は鯉淵は死の寸前になっておるのを察し、そうだ窓越しに見えたバイカル方面へ行く客車を指して、「あの列車でダモイ東京するから」と言うたら、うれし泣きをしたかと思うと「水を飲みたい」

と言うので、室の角にあったうがい水をコップに一杯持って行ったら、これを飲み分も過ぎないうちに眼を閉じ永遠の眠りについてしまった。私はこれよりどうするすべもなかった。ただ冥福を祈るのみであった。このような毎日でお正月、そして昭和二十一年春ごろ(三月)までに四百人くらい死に、一番多い日は八人死亡した。春三月になって死体は馬そりに棒ダラのように冷凍になっておるのを三重くらいにして縄でくくり運んだのであった。ああ、泣涙出るのみ、冥福を祈る。

逃走したTが捕まりカマンジール危うく銃殺を免れる昭和二十一年九月ごろ、コルホーズの砂糖大根の採取作業に三十人出せと言われ私がカマンジールとして出発した。ラーゲルからあまり遠くないし、その日は晴天で仕事もはかどりノルマは予想以上にはかどった。午後二時ころになってチオソポイが「作業員全部集めろ」と言うので集めたところ、数え始めたが一人不足と言うので、私も数えたところ、一人足りなかった。そしたら作業を停止し、乗ったこともないトラックが来てラーゲルへ帰された。これで済むのかと思っていたら、ヤポンス

キ一有賀と呼ばれ警備室へ行ったら、カンボーイが二人待っており、お前は「カールツイル」(豚箱のこと)と言われ前後に銃剣をつけたのに連れられ、行ったところは共産党幹部兵舎で監獄に入れられてしまった。それから三日たった午後三時ごろ監獄から出されラーゲルへ帰されたところ、トラックを前にして全員兵隊が整列しており、トラックの上目隠しされた逃走した男が立っており、私に銃殺にするんだから目隠しをしろと言うので、覚悟は決まっておるから必要ないと言うてはしご段を上り人の前に立った。そしたらペーボークと将校と話をすること十分以上して銃殺がとりやめになった。トラックからおろされたら逃走した男は警備員の衛兵所のところへ連れられて行き、黒の乗用車に乗せられて行ってしまった。多分死刑にされたのであろう。私はラーゲルに帰された。

ダモイ東京まで

ロクリッカを昭和二十二年五月ごろダモイ東京と言われ、馬鹿にされ客車に乗り、帰れるのかと思っていたら、チタ付近の作業をやると言われ、おろされまた作業をさ

せられた。それから昭和二十三年のお正月を迎えなければならぬのかと思ったら、ダモイ東京ダモイ東京と言うのでまたうそかと思つたが、十二月初めナホトカへ到着し乗船し、昭和二十二年十二月六日舞鶴港に到着、日本人となったのをしみじみ感じた。

シベリアの凍土の中より

和歌山県 奥山 博

関東軍第一〇七師団の終戦は、昭和二十年八月二十九日でした。同日、正午ごろ師団長命令で「第一〇七師団各部隊は明三十日の払暁を期し、敵ソ連軍に突入せよ」(死を以て突撃せよ)という命令が下った。我が軍は、八月九日突然のソ連軍の侵入による戦闘で、弾薬は尽き、食糧も全くなくなり、我が師団挺進大隊も八月十四日西口、同二十四日号什台の戦闘など、繰り返し挺身奇襲で疲労の極限の中で、各自少量の乾パンと、夜ひそかに屠殺した牛の肉を生焼きして、二十日間余りの野宿と戦